学校安全総合支援事業総合支援事業の取組について

－　緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練の実施について　－

白馬村立白馬中学校

１　はじめに

白馬村は長野県の北部に位置する人口約8,900名の村である。本校は、生徒数208名、職員数26名の山間中規模校である。保護者の多くは本村の基幹産業であるスキー場や宿泊施設で働いている。また、本村は、神城断層の上に立地しており、平成26年11月22日には、県北部を震源にした最大震度６弱を観測した地震（神城断層地震）の被害を受けている。幸いにして、命を落とした方はいなかったが、豪雪地帯であるために家屋が比較的頑丈な造りであったにもかかわらず、特に堀ノ内・三日市場地区の被害は甚大で、全壊または半壊した家屋が多く見られた。現在在籍中の中学生が小学３年生～５年生の時であり、全校生徒にとってまだ記憶の鮮明な震災である。

２　白馬中学校の防災体制について

本校は、年間３回の避難訓練を実施している。また、災害時には学校安全管理マニュアルに従って、教職員が防災組織を使った対応をしている。さらに、安全の日を月１回設けて、校内の各自の管理場所を点検している。

(1)年間の避難訓練計画

・第１回避難訓練　　４月１８日

【目的】新年度の始まりにあたり、教室からの避難の仕方、避難経路及び職員活動の確認をする。

・第２回避難訓練　　９月　３日

【目的】大地震発生に伴う生徒及び職員の安全を確保する。

・第３回避難訓練　１１月２２日（神城断層地震発生日）

【目的】緊急地震速報を利用し、学校管理下における生徒の安全確保と避難行動を安全に、迅速に、確実に行う。

(2)避難訓練の工夫

①防火扉の作動

本校では、実際に災害が発生した場合に防火扉がどのように作動し、景色がどう変化し、動線が規制されるのかを職員及び生徒に実感させるための訓練を実施している。

②避難経路の設定

本村は、冬になると屋根から大量の雪が落ち、通常で定められている避難経路を使えなくなる。そこで、第３回目の避難訓練は教室前のテラス付近が雪で塞がっているという設定で、訓練を実施している。

さらに出火場所を避けて避難する場合に、場所によっては、一度階段を使って、階上に上がってから避難するという場面もあり、通常経路を臨機応変に変更しなければ安全に外部に出ることができない。落ち着いて放送を聴くこと、冷静かつ瞬時に判断することが必要であり、職員や生徒にとって緊張感が必然的に生じる訓練となっている。

③緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

年間計画に位置づけた避難訓練とは別に、８月３０日には緊急地震速報対応訓練（シェイクアウト訓練）を実施した。生徒には実施日のみを伝え、時間は未告知で行った。朝学活が終了し、各係の仕事や、１時間目の授業の準備をしている時間帯に設定し、実施した。警報音が流れると、生徒たちは、廊下では窓際を避け、頭を守れる場所があれば近くの机の下に入るなど、冷静な対応ができ、放送での指示も落ち着いて聞く行動がとれた。１時間目が学級での道徳の授業でもあり、各担任と振り返りの時間もとれ、その反省が、以後の２回の避難訓練にも生かされた。

３　学校防災アドバイザーの関わり

本校は、信州大学の廣内教授にご指導をいただいている。本年度は「学校安全総合支援事業５年計画」の２年目にあたり、昨年度の実践をもとに計画の見直しについてもご助言をいただいた。特に、第３回避難訓練（11/22）の実施にあたっては、計画の段階から本校安全指導係とともに下記の点についてご指導をいただいた。

(1) 訓練の形態

実施日や時間の告知は、初回のような安全対策の確認を最優先にするときにはあってもよいが、経験を重ねる際には、ない方が有効的である。さらに８月 30 日のようなショート訓練の組み合わせも非常に効果があるが、必要以上の学校活動への付加があってはならない。

(2) 訓練の想定

本年度は特別教室からの避難に焦点を当てる。その際の退避行動のアイデアが重要である。理科であれば実験中、技術・家庭科であれば作業中、音楽であればパート練習中、総合的な学習の時間であれば、母集団が様々な場所に分散していることも考えられる。

その際に、実験器具や作業器具はどのようにしたらよいか、火や熱を扱っているときはどのような行動が必要か、機械音や演奏音など指示が通りにくいときのポイント、指導者が不在な場合の避難態勢など、様々な場面を想定して避難行動を考えていく必要がある。

(3) 環境作り

避難行動をイメージしつつ、恒久的に利用できる環境でなければならない。(2) のような場面でとるべき行動のわかりやすい掲示物、安全地帯の確保、大きな地震の際に落下や転倒を防ぐ機器の固定法など、環境作りには①避難行動のアイデアと②予防対策の両方を兼ね備える必要がある。さらにそこに、ヘルメットや防災頭巾といった防災避難道具も　少しずつ整備できるとよい。

4　事後の成果及び今後の課題

第３回避難訓練の際には、白馬中学校防災教育実践会議の委員にも見学してもらい、訓練後の検証会議では様々なご意見をいただいた。委員会は本校職員、学校防災アドバイザーの他、白馬南小学校防災教育担当（今回は教頭)、白馬村総務課防災担当、白馬村教育委員会教育課長・係長・主査（兼学校安全総合支援事業推進委員）で構成されている。

避難訓練時、学校職員は全体指示や生徒の誘導、各係の仕事などに従事するため、生徒の実際の動きを客観的に見ることはなかなか難しい。その点第三者がそれぞれの視点で生徒の動きや防災環境の視点で意見をいただけたことは非常に大きな成果であった。具体的には３－(3) で挙げた環境の工夫について大きなものの固定方法や、固定場所を教室の後方に集中させることで前方が安全地帯となるといったアイデアをいただいた。また、実際に災害が起きた際は、放送機器等が利用できないことも考えられ、パニックに陥った生徒たちの声で指示がかき消されることもある、廊下にはガラスが散乱し行動の制限が強いられることもある、といったさらに緊迫する場面で、情報の伝達や生徒の安否確認、安全な誘導の方法について提言をいただいた。今後の参考にしていきたい。

5　まとめ

本年度の避難訓練では、振り返りの場面で避難訓練の反省のみではなく、実際の災害時に、どのようなことが心配か、どんな環境が整っているとよいと思うか、自分たちでできることにはどのようなことがあるかといった、生徒目線で防災について考えさせることができた。これからは、教師からの提案だけでなく、生徒からも意見を吸い上げて、防災体制を整えていきたい。

廣内研究室の小保田研究生からも、防災アーカイブを活用した学習について本校生徒とともに実践を積むべきアイデアを寄せていただいている。

来年度以降も、様々な実践や検証を積み重ねながら、職員および生徒がともに考えながら、防災への意識を高めるための様々な取り組みについて考えていきたい。

（文責　教頭　寺嶋純一）

学校安全総合支援事業の取り組みについて

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立山王小学校

1 はじめに

本校は長野市の中心市街地に位置し、東は交通の要所である長野駅善光寺口周辺から、西は自然豊かな旭山までを学区とする変化に富んだ学区である。ビルに囲まれた学校であるが、すぐ西側を裾花川が流れ、校内には校章のデザインになっている白モクレンをはじめ、二百種以上の樹木や草花が生える自然豊かな学校である。大正１２年に長野尋常小学校山王部校として設立し、大正１５年に山王尋常小学校となり、昭和２２年より長野市立山王小学校となっている。かつては全校児童数が１９００名余の頃もあったが、現在は全校児童２５４名（各学年２学級）である。本校が市街地校であることや本校児童の在所が、大きく安茂里地区と第 5 地区の２つの行政区からなっているため、地域連携を進めていく上での課題が見え隠れしている。本事業を活用することでよりよい連携のあり方を探りたいと考えている。

2 長野市立山王小学校の防災体制について（概要）

年度当初に下表のように防災の組織を作り、年３回の避難訓練をおこなっている。

係	任　務
第1報	● 火災発見の第1報を事務室へ連絡(①非常ベル、②伝令、③校内電話) ● 連絡後消火係が来るまで初期消火 ● 消火係到着後は自分の任務へ

係(場所)	任　務
本部(校庭)	全体の統括、指示、指令、人員確認
通報・連絡係(事務室)	校内緊急放送を流す消防署等への通報初動指示
救護係(校庭)	病気・けがをした児童の避難誘導、手当
児童管理係(校庭)	避難した児童の人員確認、保護
搬出係(校長室)	重要物件の搬出管理
消火係(出火場所)	初期消火への対応、現場での指示
避難誘導係(各分担場所)	授業時の避難誘導〇担任(学年主任)
	授業時間外の避難誘導 北校舎 1F, 2F, 3F 南校舎 1F, 2F, 3F 体育館 校庭

３　緊急地震速報受信システム設置前の避難訓練について

非常時の組織としては整えられており、避難訓練も定期的におこなわれ、児童も職員の指示に従って整然と避難できている姿が見られる。しかし、災害が起きたときに本校の周りで何が起こる可能性があるのかという想定がなされておらず、校庭に避難をして全校児童が確認されれば終了という避難訓練になっている実情もある。災害時に起こり得る様々なことを想定しながら、二次避難の仕方・保護者との連絡の仕方等を、具体的に職員がイメージして検討し、対応を考えておくことが必要であると考えている。

４　緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

(1) 緊急地震速報受信機設置に関わる取組

ア　教職員に対する説明、研修

「緊急地震速報発報端末 地震の見張り番 Touch」について、機能や操作方法について４月に研修した。

イ　児童に対する指導

避難訓練の際に新しいシステムが導入された旨を教えた。

(2) 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

シミュレーション訓練機能を活用し、中越地震のデータを用いて訓練をした。

５　学校防災アドバイザーの関わり

（１）８月２２日（火）　　職員研修

信州大学学術研究・産学官連携推進機構本間　喜子先生より「防災の心理学」と出してお話しを頂き職員研修を行った。災害発生の危機が迫っているにも関わらず、「ここは大丈夫だ」という意識が生まれることを学んだ。そして、「バイアスは必ず生じることを理解すること」「状況と行動をパッケージ化すること」「まずは行動を起こすこと」の大切さについて話した。児童の命を預かり、安全管理を徹底する立場である職員にとって危機意識を見直すよい研修となった。

（２）１０月１０日（水）　５年　理科流れる水のはたらきの公開授業、授業研究会

９：４０～１０：２５･･･公開授業

１０：３０～１１：００･･･授業研究会

長野地方気象台　春原　城辰氏より授業中に子ども達へ指導を頂いた。

榊原　保志より授業研究中に職員へ指導を頂いた。

日本各地で豪雨による、土砂災害や河川の氾濫が発生していることをふまえて、身近な地域の危険について考える授業。事前に河川敷を歩き川や地形の様子、流れる水のはたらきに関する学習をした。本時では学区の地形図を用いて、子ども達なりに、危険箇所を推測し、評価頂いた。子ども達は既習を生かして「この辺、浸食作用が強くなり、地形が変わりそうだ。」と語り合いながら地図に付箋をはっていた。参観者からは、「良い教材だ。今後、自分や周りの人達の命を守る力にしていってくれることを期待する」といった声があった。

（３）１１月　６日（火）　避難訓練　出前授業

信州大学学術研究・産学官連携推進機構　本間　喜子先生より「ぼうさいのおなはし」と題して、①地震が起きたらどうするか　②長野県も大きな地震が発生する可能性が高いこと　③地震に対する備え　というお話しを頂いた。パワーポイントを用いながら、児童にわかり易く話された。「家具が生き物のように動いていて、びっくりした。」「落ち着いて行動できるようにしたい。」などの感想があった。

６　事業の成果及び今後の課題

学校内で防災教育の大切さを確認し合い、また学校防災アドバイザーから専門の立場でご指導いただき、学校として「子どもの命を守る」ことの大切さを職員が共有できた。また、本事業が継続２年目ということで、保護者や地域の方の関心も高まってきている。

一方で、学校が「避難所」となった場合の運営や地域と連携した合同避難訓練の実施など、まだまだ「防災・減災」の取り組みに関する課題は大きい。地域の方と連携し、防災時の地域の拠点としての学校のあり方について検討をしていきたい。

７　まとめ

学校防災アドバイザーの先生方の具体的なご指導で、本校の目指す防災教育の方向が見えてきたと感じる。２年目ということで、まだまだ課題が多く、十分な成果を得るところまで至っていないが、今年度の成果をいかしながら防災組織づくりや避難方法の改善を検討したり、職員・児童の意識を高めたり、地域との連携を深めたりしていきたいと考えている。

（文責　教頭　柄澤　　敏）

学校安全総合支援事業の取組について

－児童が自ら考え行動できる能力を養うための取組－

長野市立加茂小学校

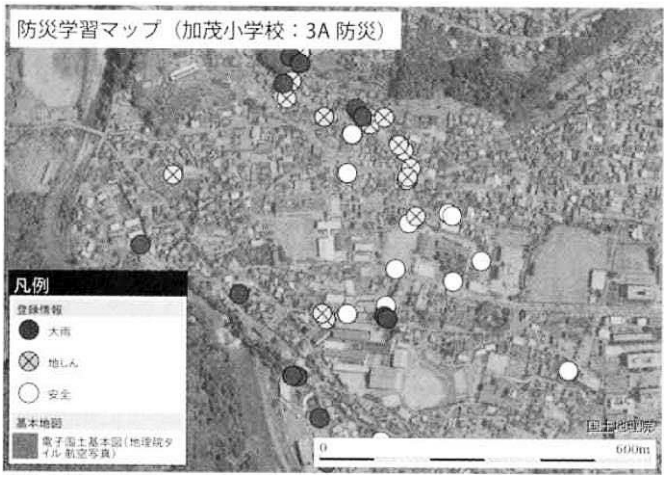
１　はじめに

長野市立加茂小学校は、県都長野市の西部に位置し、善光寺の近くにある。学区は、幼稚園から大学まで、多くの学校がある長野市の文教地区となっている。また、茂菅や小田切のような山間地もあり、変化に富んだ広い学区を持っていて、213 名の児童が通ってきている。

２　本校の防災教育について

長野市の土砂災害ハザードマップを見ると、本小学校区の多くが土砂災害警戒区域または地滑り危険箇所に入っている。有事の際には、身の安全に気を付けなければならない地域で生活している。そこで、本校では、土砂災害ハザードマップにそれぞれの児童の家の位置を記した所在地マップを作成している。

また、現在の学校防災アドバイザーの指導の下、一昨年度、信州大学と特定非営利活動法人 Dochubu が開発した防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップづくりの実践を行った。このソフトウェアは、タブレット端末と Web-GIS を連携させることで、防災情報収集を効率化し、限られた時間の中で児童が防災についての思考・判断をより深められ、かつ学年に応じた取組をサポートでき、協働的に防災マップを作成していけるものである。



３　学校防災アドバイザーの関わり

（１）　ソフトウェアの今年度用への更新と本年度方針打ち合わせ（メールにて）
　　７月～８月

（２）ソフトウェアの動作確認と授業訪問（フィールドワーク）

：8 月 30 日 8:45～10:20

① 参加者：Duchubu 落合さん　信州大学教育学部学生 4 名

② 内　容：タブレット端末が正常に動作しているかの確認と、子どもたちの活用の様子を観察。学生チューターへの助言。

（3）授業訪問（フィールドワーク）　：8 月 31 日 8:30～10:30

③ 参加者：信州大学教育学部廣内大助教授、同学部学生 4 名　他校からの参観者数名

④ 内　容：班に分かれてフィールドワークを行うため、最中の交通安全面およびソフトウェアの操作等、児童の活動について円滑に行えるようにしていただいた。

（4）ソフトウェアについて：Dochubu 落合さん

・フィールドワークで行ったデータが見えなくなるなど、不測の事態が起きるたびに電話やメールで、解決のために複数回のアドバイスをいただいた。

（5）今年度の実践について：信州大学教育学部廣内大助教授

・今年度の実践を進めるにあたって、児童が自ら考え行動できる能力を養う取組について、メールにて複数回のアドバイスをいただいた。

4　活動状況

（1）　活動のテーマ・参加者

自宅で発災したときに避難所までの避難経路を考える。３学年児童 40 名。

（2）活動のきっかけと目的

子どもたちが、マップの中から自分たちの家を探し、その地図に書き込まれている線の意味を知ったときに、「いざというときに家から安全に小学校まで避難することができるのか確かめたい」という想いが高まった。

そこで、いざというとき、自宅から安全に避難することが本当にできるのかを考え、自宅から避難所である学校までのルートが本当に安全なのかどうかを確かめることを通して、一人一人が防災や安全への意識を高め、主体的に防災や安全について取り組む。

班ごとに調査活動

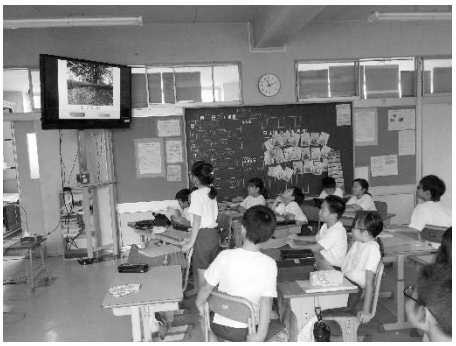
（3）活動内容

8 月 30 日、31 日

野外活動で、大地震になったときに危険と感じた情報をタブレット端末に記録しながら収集していく。

9 月 4 日、5 日

各班の調査データが統合された防災マップをみながら考察する。



調査後、全体での話し合い

9 月 6 日、20 日

野外活動で、同じスタート地点からそれぞれの班が決めたルートを通り、避難所である小学校までの避難経路が安全に行けるか調査する。

9月中旬～

各班の調査データが統合された防災マップをみながら、適切な避難ルートはどこなのかや、何に注意すべきなのかなどについて考える。

9月下旬から10月上旬

学習したこと基にテーマ別チームを作り模造紙や模型を用いてまとめる。テーマは「理想の西長野」「地区別の危険箇所」など、子どもたちのアイディアで決定した。

作成したものについては、その後、日本損害保険協会主催の「ばうさい探検隊マップコンクール」へ出品した。

制作活動

（4）防災マップの様子

5　事業の成果及び今後の課題

・ICT（タブレット端末）と GIS（地理情報システム）を活用した防災学習の取組を実施することができた。

・日常的に目にしてきた裏山や通学路などを防災の視点で見ることができた。

・班での活動を全体に紹介する必要があるので、伝える力が向上した。

・タブレット端末を使った学習であったので、ICT 活用の力が向上した。

・タブレット端末にコメントを入力するので、習いたてのローマ字を習得する力やタイピングする力が向上した。

・野外活動で自ら見て回り、実際に安全に避難できるのか考え合ったことで、自分たちの

住む地区の安全について考えを深めることができた。

・子どもたちが決めた最適な避難ルートが通常の通学路と異なる結果となった。そのことから、通学路はお家の方がどのような思いで決めたのか、本当に安全なのは自分たちが調査結果から導き出したルートか、お家の方が決めた通学路か議論になり、一度考えた自分たちの成果ともう一度見つめ直すという、より深い学びの場が生まれた。

・地域における防災活動も進められているが、地域と学校が連携するに至っていない。学校での防災教育を紹介するなど、できるところから進めていきたい。

６　本事業に関連した取組の発信（スタート時からの取組）

（１）　日本教育工学協会：第 42 回 全日本教育工学研究協議会 全国大会にて発表
平成 28 年 10 月 15 日
・参加者：藤井善章教頭、野池徹哉教諭、小松賢吾教諭
・内　容：タブレット端末による GIS を用いた防災学習支援用ソフトウェアの開発

（２）　廣内大助教授講義の長野市教職員研修講座「大震災から学ぶ学校の防災管理、防災教育」の中で実践発表
平成 29 年 7 月 14 日
・発表者：藤井善章教頭
・内　容：見つめ直そう私たち加茂地区の安全

（３）　日本教育工学協会：「教育の情報化」実践セミナー 2017 in 飯田にて発表
平成 29 年８月 26 日
・参加者：藤井善章教頭
・内　容：GIS を用いた防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップづくり

（４）　日本教育工学会：第 33 回全国大会にて発表　平成 29 年９月 16 日
・参加者：藤井善章教頭
・内　容：小学生の防災マップ制作を支援するアクティブラーニング・ツールの実践検証

（５）　日本教育工学協会：ニューズレターNo.121（2017 vol.3)に掲載
平成 29 年 11 月 1 日発行
・内　容：GIS を用いた防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップづくり

（６）長野市教育センター研修講座にて実践発表
平成 30 年 7 月 6 日（金）
・発表者：武田昌之
・内　容：見つめ直そう私たちの加茂地区の安全

（７）日本教育工学会：第 34 回全国大会にて発表　平成 30 年 9 月 30 日
・参加者：藤井善章前教頭　小松賢吾　武田昌之　他 4 名
・内　容：小学生児童による通学路の危険度判定を支援するアクティブラーニング・ツールを用いた防災授業実践

（文責　教諭　武田昌之）

学校安全総合支援事業の取り組みについて

－　～水害が起きたときのために～水害対策避難訓練を通して　－

長野市立松代小学校

１　はじめに

本校は、松代扇状地の末端部と千曲川が形成した自然堤防が接する位置に当たり、神田川、蛭川という２つの小河川に挟まれている。扇状地の末端部のため、傾斜はあまりないが、千曲川浸水エリア（長野市洪水ハザードマップ）に位置する。

児童数は２８５名、各学年３０名以下の２クラス編制規模である。

２　長野市立松代小学校の防災体制について

本校の防災教育のねらいの一つとして、「非常事態（地震・火災・防犯）が発生したときの安全かつ迅速な避難の方法を知り、安全についての意識を高める。」があり、その重点は、年３回の避難訓練を通して、非常事態が発生したときの安全かつ迅速な避難の方法を知るとともに、日常の安全管理について意識を高めることである。

これらの非常事態（火災・地震・防犯）に対しての指導や避難訓練を年４回実施し、いざという場合に、実際に「自分の命は自分で守る」動きを身につけられるように進めてきた。また、避難するだけでなく、集団での下校訓練、保護者への引き渡し訓練も行ってきた。しかし、これまで本校は河川が近くにありながら、水害対策の避難訓練等は実施してきておらず、ハザードマップ上では浸水エリアに該当することから、今回の事業を通して、本校における水害対策について取り組みを始める機会としたいと考えた。

３　水害対策に関わる取り組み

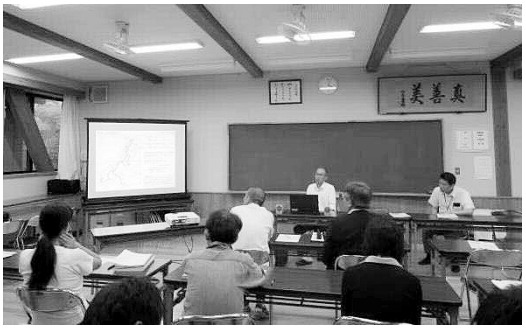
（１）　教職員に対する研修

職員研修「水害が起きたときのために」を実施

平成３０年９月２０日（木）１５：３０～１６：３０　本校会議室

講師は、千曲川河川事務所　防災情報課長

宮尾　伸憲　氏



内容　①洪水の危険性について

・千曲川の概要

・過去に発生した洪水

・松代小学校付近の水害の危険性

②情報の収集について

③避難の行動について

（２） 避難訓練

次のような内容で平成３０年１１月２７日（火）に実施。

①ねらい

災害に対する関心を深め，非常事態（水害）が発生したときの，安全かつ迅速な避難の方法を知り，非常事態の場合の避難についての心構えが持てるようにする。

②日時　　１１月２７日（火）第３校時

③事前指導（学年・学級ごとに）

○水害がおきた時の避難の方法について話す。

・千曲川が氾濫した時は，松代小学校が水没する危険性があることを伝える。
・千曲川が増水した時の情報が学校に入った時に緊急避難をする。
・避難が必要な場合，限られた時間で下校の準備をする。
・学校放送の合図で，学級ごとにすはま広場へ移動する。
・学級ごとに整列し，係職員の指示を聞く。
・学級ごと担任を先頭に，祝神社へ向かう。
・今回の訓練では，松代小学校東門から出て正門から入って戻る。

④訓練の流れ（基本的な避難の仕方）

ア　１０：５５　放送

「訓練，訓練，大雨により，千曲川が増水し氾濫の危険性が高まりました。全校避難の必要があるため，１１時０５分までに，下校の支度をしなさい。」

イ　１１：０５　放送

「訓練，訓練，ただいまより，おすわさん（祝神社）まで全校避難を開始。これから，すはま広場へ集合。」

ウ　昇降口から出て、広場の東より、１年２年３年４年５年６年の順になるように，担任の指示で移動を開始する。

エ　担任の指示で，各クラスの列に並ぶ。

オ　人員確認，本部へ報告　　担任→学年主任→教頭→校長

カ　避難開始

指示（教頭）→東門，正門，みつびきの森，すはま広場，の順に移動。教頭を先頭に，１年２年３年４年５年６年，養護教諭，校長先生の順に移動する。

キ　人員確認，本部へ報告（すはま広場に戻ってくるが，祝神社に着いた想定）

○担任→学年主任→教頭→校長

ク　避難訓練のまとめ

①千曲川河川事務所の方のお話
②校長先生のお話
③連絡

４　学校防災アドバイザーの関わり

（１）職員への研修

これまで水害を想定した避難訓練を実施したことが無い状況であったため、水害を想定した場合、本校にはどのような危険性があるのか、どの時点で、どう判断して避難するのかなど、知りたい内容がたくさんある中、①過去に発生した洪水　②松代小学校付近の水害の危険性について　③情報の収集について　④避難の行動についてという点について研修を受けた。ポイントを押さえ、スライドや映像で分かりやすい説明であり、千曲川の堤防が決壊する場所は、現在２カ所想定されるが、万が一決壊したとしても、本校地帯への浸水には５，６時間かかること、５ｍの浸水は、２階部分の半分まで水に浸かることになるので、２階への避難は難しいことなどの情報もとても役立つものであった。

（２）児童に対する指導

避難訓練を参観していただいた後、次の３点について全校児童にお話しいただいた。

① ハザードマップを見て、避難する場所を決めておく。

② 迷わず避難場所に行けるように確認しておく。

③ 避難指示が出たら、必ず逃げる。

河川事務所の防災担当の視点でのお話と的確なアドバイスであり、児童にも分かりやすい内容であった。

５　事業の成果及び今後の課題

（１） 水害を想定しての避難訓練を初めて実施したが、児童はこれまで訓練を行ってきた災害とは別のものとなるため、真剣に話を聞き行動する姿が見られた。

（２） 現在避難場所としている場所は、ハザードマップでは安全な区域であるが、

・全校児童を移動させ待機させる場所として、距離、広さは妥当であるか。

・訓練当日は快晴であったが、実際には悪天候であるとの予想から、雨などから待避する場所のある避難先を考えていく必要があるのではないか等が、課題として残る。但し、なかなか適当な場所が見つけにくいことも事実である。

（３） 今回実施してみて、対応を考えていかなくてはならない点が明確になってきた。また、避難訓練後の実践委員会で参観者からいただいた質問、意見も参考になった。浸水が想定される場合の情報機器の待避場所、保護者への連絡方法や引き取りの段取り、等今後検討していきたい。

６　まとめ

本事業を通して初めて実施した水害対策避難訓練であったが、近年各地で起きている様々な災害を考えると、とても必要な訓練であることを感じた。また、検討が必要な部分を職員で共有しながら改善し、より安全な対応や避難へとつなげていきたいと考える。

（文責　教頭　小野　英子）

学校安全総合支援事業の取組について

―地域と共に総合防災訓練―

長野市立信里小学校

１　はじめに

信里小学校は、長野市の南に位置する茶臼山の山腹を通る県道の峠に位置し、児童数４４名の山間小規模校である。東には眼下に長野市街地が広がり、北にはアルプスの峰々が一望できる恵まれた環境にある。農業が盛んで、野菜やりんごの栽培の他に、400 を超える溜め池を水源に稲作も広く行われている。茶臼山はかつて大規模な地滑りが発生したことでも知られ、現在でも地滑り防止のための維持管理が続けられ、地滑りの跡地は恐竜公園や茶臼山動物園として利活用されている。地域の災害の特性としては、土砂災害が挙げられるが、耕作放棄地の増加に伴って使われなくなった溜め池も潜在的な危険である。大雨の時には側溝から水が溢れ出たり、強風や落雷の時に身を隠す場所が少なくなかったり等、傾斜地特有の気象災害への備えも必要である。

２　本校の防災教育について

本校は、本支援事業の指定を受け５年目となる。学校防災アドバイザーの先生方にご指導をいただき、自ら考え行動できる子どもの育成と地域と連携した防災活動をめざして、下記のような実践を行ってきた。

【平成３０年度の取り組み】

(1)　地域と連携して行う避難訓練の充実

①基本の避難経路確認（緊急地震速報受信システムの利用）

②休み時間の避難訓練（集合場所への予備訓練・篠ノ井消防団第五分団による指導）

③信里子どもプラザとの合同避難訓練（特別教室からの避難の仕方を確認）

④不審者対応（信里駐在所警察官による不審者役及び児童への指導・非常階段からの不審者侵入を想定した職員対応訓練）

⑤児童引き渡し訓練（凶悪犯地域徘徊を想定・保護者への緊急時メール配信及び児童引き渡し手続き訓練）

⑥青池保育園と合同訓練（電気系統使用不可を想定した職員の行動訓練・防火扉作動時の避難の仕方と避難経路の確認）

(2)　地域と共に「総合防災訓練」

・区長会（防災会）と共催

(3)　地域学習「危険箇所と水資源を知る」→防災行動マップの更新、活用

・区長会と共催　・地域委員会、民生委員、地域ボランティアの協力

(4)　岡崎市立常盤東小学校との防災授業交流（６年）

(5)　５カ年を１サイクルとした信里小防災学習計画の見直し、作成

３　実践事例

（１）総合防災訓練　９月８日(土)　土曜参観日

１校時：避難訓練２校時：避難所体験・防災グッズつくり 3.4 校時：各地区防災訓練

【ねらい】

◇学校と地域が一体となって避難訓練を行い、避難の仕方を身に付ける。

◇避難所体験や防災グッズづくりを通して防災への意識を高める。

【参加者】

児童・職員・保護者・篠ノ井消防署消防士１名・消防団・学校運営委員・民生委員・学校ボランティア・地域住民（各地区において）

【活動の概要】

①参観日に各教室に集まった保護者や地域住民が、児童と共に緊急地震速報受信システムを活用した避難訓練に参加。

［確認事項］

地震速報の聞き方・机下への入り方・頭を守りしゃがむ・教室以外での身の守り方・落下物の有無・避難経路・出口・「おはしも」・児童の後ろに並ぶ・お年寄りや小さい子ども連れを前にして並ぶ・ハンカチの使い方・非常階段の降り方　等

・緊急地震速報受信システム作動、緊急連絡放送、机下へ潜り安全確保。

・避難指示放送を聞く。雨天のため体育館へ避難。地区ごとに整列。

・避難者数確認。全員避難完了。まとめの会にて消防士よりご指導。

②避難所体験

・体育館内に展示した物資の見学、避難所体験

［展示品］

仮設トイレ・ファミリールーム・ファミリーテント・使い捨てカイロ・非常用食料・飲料水袋・紙コップ・ブルーシート・真空パック毛布・避難所開設グッズ各種・避難所間仕切りボード、簡易担架　等

③防災グッズづくり

・新聞スリッパ、ビニール袋カッパの作り方を６年生が参加者に教える。

④地域防災訓練

・当初、地域からの避難指示放送により、参加者が学校から各地区へ避難し、各地区で行う防災訓練へ参加し、その後、地域学習を行う計画であったが、当日大雨警報発令により、学校で行う防災訓練は保護者や地域住民と下校するところまでで終了とした。その後に地区の防災訓練は、区長会（防災会）が中心となり地区ごとに実施した。児童は自由参加としたが、多くの児童が保護者と共に参加した。

（２）地域学習「地域の危険箇所と水資源を知る」

【ねらい】

◇児童は地域の方と一緒に自分の地区を歩き、危険箇所や水資源、過去の災害等について知り、日常気を付ける事や災害時の避難の仕方について考える。

【参加者】

児童・教師・各地区の説明案内役の学習ボランティア・区長会長

【活動の概要】

①各地区での現地調査　９月１４日（金）14：00～15：35　(5.6 校時）下校 15：40

［調査内容］

新たな危険箇所・改善された危険箇所・気を付ける事・水資源（井戸、ため池、湧き水、沢）・危害獣の出没・災害時のう回路・過去にあった災害・災害防止の工夫

②調査結果を全校発表

１０月１１日（木）・１２日（金）8：25～8：45

朝の時間

③防災行動マップ更新　４．５年

１２月２９日（木）9：45～10：30　(2.3 校時）

（３）児童の感想より

・災害に備えて、学校はこんなにも色々な物をたくさん用意していることがわかり驚きました。

・間仕切りボードの中で家族全員がずっと過ごすのは大変です。隣との境がボード１枚で不安に感じました。

・大体の家に井戸があることがわかりました。普段は危険なので蓋がしてあるけれど、いざというときに使えるかもしれない。飲める水なのか調べてみたいです。

・道路が寸断されたとき、古道を知っているといいことや、そこの整備が必要だとわかりました。

・学校以外にいるときや子どもだけのときの避難の仕方を家族で確認しました。公民館以外の地区の避難場所がわかってよかったです。

４　学校防災アドバイザーとの関わり

（１）８月９日（木）15：00～17：00　信州大学教育学部教授　廣内大助先生

・地域と共催の総合防災訓練　・防災行動マップ更新について

・岡崎市常盤東小学校との交流について

（２）１１月２８日（水）9：00～12：00
信州大学教育学部教授　廣内大助先生　同学部学生
特定非営利活動法人ドゥチュウブ　落合鋭充氏
・地域学習のまとめ
・４．５年生の電子マップへの入力支援

（３）１２月１９日（水）10：00～12：00
信州大学教育学部教授　廣内大助先生
・入力した電子マップの活用　・総合防災訓練の見返し
・来年度以降の防災教育（信里小防災学習５カ年計画）について

５　まとめ

（１）様々な想定で避難訓練を実施する中で、今年度は新たに防火扉の点検と防火扉を作動しての避難訓練を行った。防火扉の避難口を潜り抜ける体験ができたこと、基本の避難経路以外に新たな避難経路を体験することができた。

（２）初めて行った地域と共催の総合防災訓練は、地域防災への意識を高めた。

①保護者や地域住民、消防団と共に緊張感のある避難訓練が行えた。避難訓練の経験が少ない保護者や地域住民が、学校の避難訓練を体験することができた。

②学校管理の災害用備蓄物資を体育館に展示したことで物品の点検ができたこと、学校保管の災害用備蓄物資を保護者や地域住民が知ることができた。また、避難所開設用品や仮設トイレ、間仕切りボードで仕切られた部屋等、実際に確認できたことは避難所を現実のものとして感じることができた。

③身近にある材料で新聞スリッパやビニール袋カッパを作ったことは、災害への備えについて意識を高めることにつながった。

④大雨警報発令により日程や内容を変更して訓練を行った。児童は自由参加とした地区の防災訓練であったが、多くの児童が保護者と共に参加し、地域の大人の避難訓練を知ることができた。また、雨量や警報、災害は突然起きることに意識が向いた。

（３）総合防災訓練の後半に行う予定であった地域学習を別日に行った。平日にもかかわらず、区長、学習ボランティアなど地域の皆さんの協力で行うことができた。危険箇所点検に加え、水資源や災害時のう回路、危害獣の出没についても知ることができ、防災行動マップを更新した。地域学習を積み重ねてきたことで、児童は自分の地区を知り、地区の人々との繋がりができてきている。
このことが真の地域防災になってきていると考える。

（４）防災アドバイザーの先生方のおかげで、岡崎市常盤東小学校との防災学習交流が、テレビ会議システムを活用して実現した。互いの防災活動を伝え合い、意見交換ができたことは６年生にとって大変有意義な交流となった。ふるさと信里を語る絶好の機会をいただけた。

（５）今年度、５か年１サイクルとなる地域と共催の防災教育計画ができあがる。これまでに培ってきた地域と共に行う防災活動を今後も大切にし、活動が継続し充実したものとなるように地域とともに実践を積み重ねていきたい。

（文責　教頭・宮川史枝）

防災教育を中心とした実践的安全教育取り組みについて

ー　実践的な防災訓練の実施　ー

長野市立西部中学校

1　はじめに

西部中学校は、長野市西部市街地から小田切・芋井地区を中心にした飯綱の山間地までと広い学区をもつ学校である。学校の立地は、住宅密集地にあるが、学区が広いため、バスを利用して登校する生徒もいる。また、長野市西部地区の避難場所、救護所の指定を受けており、大災害の発生時には地域住民が利用することが想定され、地域の方とのつながりや連携が必要不可欠である。

安全防災総合支援事業に参加し４年目となる今年、緊急地震速報受信システムの活用し、より多くの地域の方々とともにより実践的な避難訓練を実施することを目標に据えて活動してきた。

2　西部中学校の防災体制について

校内防災体制　（略）

3　避難訓練の実際

	期日　時間	想定	備考
第１回	４月 12 日(水)　第４校時	授業中　地震と火災 二次避難	
第２回	９月 19 日(水)　第３校時	授業中 地震から火災 二次避難	緊急地震速報受信システム活用 地域の方の参加
第３回	12 月 12 日(水)　第３校時	授業中 地震 一次避難	緊急地震速報受信システム活用
第４回	２月 13 日(水)　予定	休み時間 一次避難	緊急地震速報受信システム活用

4　学校防災アドバイザーの関わり

（１）アドバイザー氏名

信州大学教育学部理数科学教育講座　榊原保志　教授

（２）第２回避難訓練

①事前指導（8 月 23 日）

・地震だけでは屋内にいた方が安全な方が多いので、地震だけなら安全な場所に１次避難し、火災が発生した場合のみ避難する。

・地震が起きたときは職員はまず巡視して、火災が発生していないか、負傷者が出ていないか、破損カ所がないか等を確認する必要がある。

・火災が発生していたら、どのような避難をするかを全体に伝えて避難させることが大切である。
・生徒は毎年避難訓練をしていて、だまって先生の話を聞きその通りに動くことができるが、災害が実施に起こるとマニュアルにはない不測の事態がおき、臨機応変な対応を迫られる。職員のための避難訓練と考えた方がよい。

②訓練の実際（9 月 19 日）
・地震から火災が発生し、避難をするように想定を変更した。
・学区内の区長、近隣の保育所、高齢者介護施設に通知し、訓練に参加して頂いた。
・学校に避難してくる園児や高齢者の避難の手伝いをする担当者と生徒を予め決めておいた。
・避難訓練の計画に沿って行動できるかどうか、職員から不安の声が上がった。計画通りに訓練をするのではなく、想定外のことにも対応できるための訓練であり、時間を気にせずに、1 つ 1 つのことをきちんと行うように係として方針を伝えた。
・大災害のときに、不在でも救護所になる体育館を地域の方が利用できるように、避難訓練に参加された区長さんと打ち合わせを行った。

【園児とともに避難】

③防災講話（9 月 19 日）
生徒の感想

○最近起きた災害の話をお聞きしたけれど、今年は特に災害が多いと思った。身近で災害が起こったときに、どうやってたいおうすればいいのかがよく分かった。今日学んだことを心がけて避難したい。
○　地震が終わった後にやってはいけないことが自分の考えと真逆だったのでちゃんと覚えたい。震度 7 であんなに被害があったので、対応できるようにしたい。
○　落ちてこない。倒れてこない。移動しない物なのか日々確認したい。初期消火やブレーカーを落とす。ガスの元栓をしめることは、非常に大事だと思った。私は、非常持ち出しの準備ができていないので、ラジオや非常食、薬箱、ヘルメット、懐中電灯は用意しておきたい。ベランダから逃げるときはドアを突き破っていくということを初めて知った。避難中は、電線に触れないように、海や川から離れると同時に、「共助」も忘れないようにしたい。
○　「共助」の心を日頃から持って、いざというときに正しい行動をとりたい。

４　事業の成果及び今後の課題

（１）成果

・教職員が、マニュアル通りの訓練では対応できない想定外の事態に対応するために、常に「こうなったらどうする？」という様々な想定をし、その時にどう動くかを事前に決めておくことの大切さを学んだ。

・近隣の方々と防災を通じて連携が進んだ。

・緊急地震速報受信システムを活用した避難訓練が実施できた。更にいろいろな想定の下スムーズな避難、誘導の訓練を行っていきたい。

・生徒が自分の身は自分で守るという基本を意識することができた。

・中学生も地域の住民の一人であり、大災害の時には力と知恵を発揮して、共助の考え方で、共にのりきることの大切さを学ぶことができた。

・生徒が、家庭でも防災の話題について家で話しをするなど、日頃から防災について意識することの大切さを学んだ。

（２）今後の課題

・不測の事態を想定した防災訓練、傷病者がいる場合や放送機器が使えない場合の避難訓練を行っていく。

・地域の方とだけでなく、小学校とも連携した防災訓練や引き渡し訓練を実施する。

５　まとめ

・今回初めて、緊急地震速報受信システムを活用した避難訓練と地域の方と共に行う防災訓練ができたことは意義があったと思う。いろいろな状況の避難訓練を定期的に行うことが大切である。

・学校防災アドバイザーの的確な助言により、シナリオ通りに動く避難訓練から、より実践的な避難訓練に変えていくことができた。避難訓練は、シナリオ通りにできることが目的ではなく、「こうなったらどうしたらいいのだろう」と職員が考え、意見交換し、災害に備えるような学校にしていきたい。

（文責　安全・防災教育担当教諭　窪田　清幸）

豊野中学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

長野市立豊野中学校

１　はじめに

本校は、昭和２９年に上郷村と鳥居村が合併して豊野町となり、昭和３２年に旧豊野東中学校と旧豊野西中学校を統合し豊野中学校として開校した。平成１７年に長野市と合併により長野市立豊野中学校となる。平成２３年には校舎、体育館の全面改築により耐震化が行われた。２８年度に開校６０周年を迎え、本年度は１２学級生徒数２６４名の学校である。学校の伝統として「ノーチャイム・２分前着席」により生徒は時計を見て行動し、清掃は「無言・膝つき清掃」として定着している。

「ゆたかの」と呼ばれるこの地域を通過する国道１８号線はアップルラインの通称をもつ。校章のデザインにリンゴの葉が用いられ、校歌では「りんご花咲く」「りんご色づき」と歌われ、りんごが地域の特産となっている。

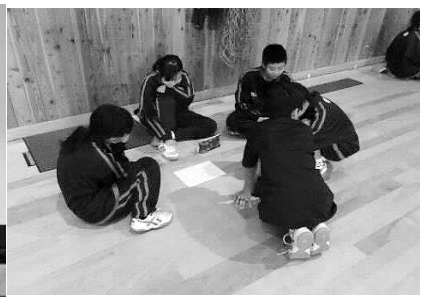
２　本校の防災体制について（概要）

豊野地区は戸隠山麗を源とする鳥居川が町の東西を二分して流れ、飯縄山山中から流れる浅川が南部を縦断して千曲川に合流していく地形であり、何度となく洪水による被害を受けてきている。平成７年７月の鳥居川の氾濫では水深が深いところで４ｍを越え、床上浸水２４４戸、ＪＲ信越線・飯山線が不通、国道１８号線が寸断される大被害となり災害救助法が適用された（豊野町誌より）。学校周辺は長野市ハザードマップによると洪水時浸水の深さは５ｍ以上で、浸水の可能性がある避難所となっている。指定緊急避難場所として洪水等は外れている。

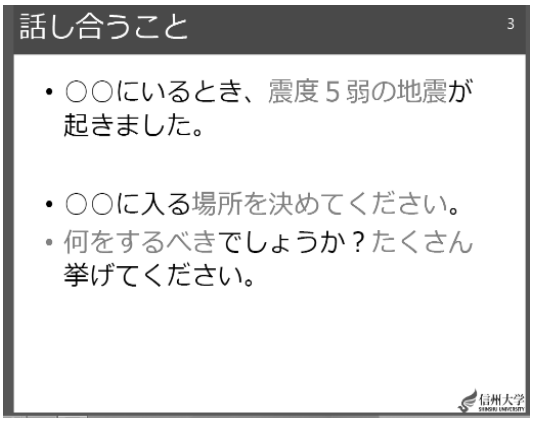
本校では防災計画、学校安全計画、危機管理マニュアルを危機管理指導部で毎年見直し改定を行っている。防災訓練は年３回実施し、１回目は消防署の方に来ていただいて災害時の通報や避難訓練の様子を見ていただき、指導を受けている。２回目は、昨年度導入した緊急地震速報受信システムを利用して初めての訓練を実施している。３回目は２時間目の休み時間に実施し、生徒が放送を聞き自らの判断で避難をする訓練を実施している。２回目に使用した緊急地震速報受信システムも利用して、自分の判断で地震が起こった際に身を守る訓練、揺れが収まった後の建物・施設の安全確認及び避難についての訓練を行っている。

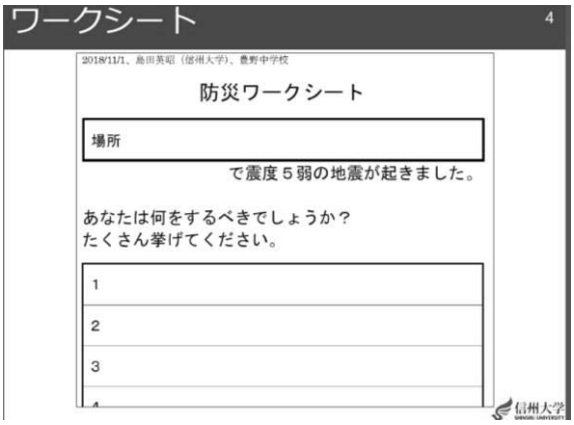
３　学校防災アドバイザーの関わり

昨年度からお世話になっている学校防災アドバイザー信州大学学術研究院教育学系准教授島田英昭先生との打合せの中で、生徒に防災に関する講演について提案していただき、３回目の防災訓練と合わせて防災に関する講演会を依頼した。



当日は、地震を想定した防災訓練を実施した後、全校生徒が体育館に集合して「防災対策でいちばん大切なこと」と題して防災に関する講演を聞いた。講演の中である場所で震度５弱の地震が起こったときに何をすべきかを考えるグループワークを行った。





生徒は５，６人のグループになりワークシートに地震が起こったときに自分がいる場所を決め、そこで何をすべきかを考えた。生徒は「学校の廊下」、「食品販売店」、「トイレ」、「お風呂」、「遊園地」、「高層ビルの中」など様々な場所を考え、「棚や窓から離れる」、「店内のアナウンスを確認し、避難経路を確認しながら進む」「扉を開ける」、「ブレーカーを落としガス栓を閉じる」、「机の下にもぐる」など起きた場所の状況をグループの人と共有しながらさまざまなことを挙げてきた。

島田先生は、生徒たちが挙げてきた場所と対処について、肯定的に取り上げながら、いろいろな事を考えておくことが防災を考える上で大切であることを話され、「災害が起きたらどうするか、人間は想像することができるのです。考え続ける事、これが最大の防災対策です。」とまとめていただいた。

４　事業の成果及び今後の課題

講演会後、感想を生活記録に次のように書いている。

今日の避難訓練、休み時間に急に放送があったので、びっくりしまた。講演ではグループに人と「地震が起こった場所」と「地震が起こった後そこで何をするか」を考えました。グループの人と地震が起こった場所のことや、どんなことを一番にしてやるかを考えて楽しかった。
今日は訓練をしてから体育館で大学の先生に来てもらい、地震が起きた後何をするかについてグループで考えました。とてもおもしろい先生で楽しく話し合いができました。先生が最後に話していた想像することは、サルにはできなくて人間にしかできないから、常に考えることが大切だなと思いました。
避難訓練は休み時間だったので、少し驚いたけれど、落ち着いて行動することができてよかった。講演会で信大の先生から「考え続ける事、これが最大の防災対策」という話がありました。地震はいつ起きるかも分からないので、今回のことを忘れずやっていきたい。

講演やグループワークを通して、いろいろな場面や何をするかを想像して考えることの大切さに意識を向けることができた。校内で行う避難訓練は、緊急地震速報受信システムを活用したり休み時間に行ったりと少し変えた部分もあるが、毎年同じ想定で繰り返し行われている実態もあるので、保護者や地域とのことも踏まえて内容についても見直していく必要性を感じた。

５　まとめ

支援事業２年目で緊急地震速報受信システムを利用した防災訓練を２回実施することができた。次年度、このシステムの有効活用をさらに考えていきたい。

学校防災アドバイザー派遣については、防災について考える機会となり生徒にとって有意義であった。次年度以降は実際の訓練についての指導や助言、防災マニュアルの見直し等にも協力をお願いしていきたい。

本校の体育館は緊急避難場所となっている関係で、昨年度はステージ天井材の張替やガラスの飛散防止施工を行った。また、今年度は。地域の防災関わる資機材等の準備を進めてきている。緊急避難施設として、学校だけでなく地域と連携して防災について考えていくことを今後具体的に進めていく必要がある。

（文責　教頭　小林　隆）

中学校区内の小学校および地域と連携した防災管理・防災教育の充実に向けた取組について

― 学校安全総合支援事業 ２年目の取組 ―

須坂市立相森中学校

１ はじめに

本校は須坂市の市街地に位置し、全校生徒数３１５名・１３学級（うち特別支援学級２学級）の中規模校である。

生徒は毎年、市内６小学校から入学してくる。そのうちの多くが豊洲小学校・旭ヶ丘小学校から入学してくる生徒で占められる。両小学校と本校の三校で中学校区の単位を形成し、合同で諸活動（例えば人権教育研修会や学校保健委員会など）を行っている。

東日本大震災をはじめとする全国各地で発生している災害を契機とした、昨今の防災に対する意識の高まりを受けて、本校においても、これまでの災害に対する備えやいざというときの対応の見直しをするべきではないかという考えをもとに、昨年度より実践的安全教育総合支援事業に依頼し、学校防災アドバイザーからの支援を受けている。

昨年度の取組を振り返ったときに、より実践的な見直しを進めていく必要があるという課題が残された。その課題解決のためには、まずは校区内の小学校および地域との連携が必要ではないかという考えに至った。

須坂市のハザードマップによると千曲川の氾濫が発生した場合、豊洲小学校は５ｍ以上の浸水被害の可能性があるとされている。さらに防災マニュアルによると、豊洲小学校は浸水被害に見舞われ自校から避難をしなくてはならない場合には、まずは近隣の市立北部体育館に移動することになっており、それでもなお危険な場合は相森中学校に避難することになっているとのこと。実際、昨年１０月の大雨の際、豊洲小学校は周囲の道路が冠水し、登校する児童の安全が保証できないということで臨時休校の措置をとった。当日は、本校も職員を通学路に配置し､安全を確認した上で時間を遅らせて登校する対応をとった。

２ 昨年度（１年目）の取組の振り返りから

一昨年度まで本校で実施してきた避難訓練（年２回）は、学級担任が避難場所に生徒を誘導して人員点呼を行い、その後職員が係分担を確認し、時間があれば消火器の使い方の指導を受ける内容にとどまっていた。体育館が地域の避難所となるような大地震や大雨を想定した訓練、生徒を保護者へ引き渡す訓練、さらに授業以外の時間、登下校時など、様々な状況によってどう判断し、どのように対応すべきなのか等を考えておく必要があるなど課題が多かった。

そこで、まず学校防災アドバイザーの長野地方気象台の気象情報官の佐藤義之先生に職員を対象に「自然災害のリスクについて」お話していただいた。そして、第２回の避難訓練にもお招きにし、新たに試みた「引き渡し準備のための地区別の集合」「ホワイトボード

を利用した人員確認」の様子を見ていただき、全校生徒に対しても「命を守る防災」についてご講演いただいた。また、訓練について職員で反省をまとめ、それに関わって信州大学教育学部教授の榊原保志先生から「防護団の見直しなど」について、より実践的な対応について職員にアドバイスをいただいた。以上の実践の成果と課題として次のことが挙げられた。

(1)防災への備え（リスクマネジメント）に関して自校の備えの必要性について、研修会や避難訓練を通して、全職員の意識の中に芽生えてきた。また、須坂市教育委員会や市の健康づくり課および危機管理課にも一緒に考えていただく機会を設けていただいた。ただし、風水害などについては、情報をより早くキャッチし適切かつ迅速な指示が出せるようにする工夫が必要である。

(2)最悪の事態を想定し、子どもの命を守ることを最優先した取り組みとして、臨機応変に対応できることも必要であるが、職員の係分担・内容を見直し精選することができた。

(3)さらに今後の課題として、榊原先生から以下の提案があった。
①防災学習の実施→授業参観日に全クラス防災学習の公開授業をしてみたらどうか。
②相森中学校区の小学校，保育園と合同引き渡し訓練の実施を検討してみてはどうか。
③相森中学校区の小学校,保育園と教育委員会,市危機管理対策室との防災懇談会の実施。
④積雪時（冬季）の避難訓練を実施する。
以上のことから、校内防災担当係会で検討し、今年度は中学校内の小学校および市教委・地域と連携をした防災への取組を推進していくことにした。

３　学校防災アドバイザーの関わりを含めた今年度の実践

(1)中学校区の連携づくりのための打合わせ
①８月２日　三校校長・教頭打合会
三校（相森中・豊洲小・旭ヶ丘小）の校長および教頭が集まった会議の中で、本校から昨年度の実践的安全教育総合支援事業についての取組を説明した。さらに今年度は可能な範囲で小学校とも連携していきたい旨を伝え、賛同をいただいた。
②９月２１日　三校合同災害対策に係る打合会
三校の教頭および担当職員に参加を呼びかけて、引き渡し訓練を中心に、防災に関わる意見交換の場をもった。既に、豊洲小学校は引き渡し訓練を実施済みであることなど考慮して、今年度は三校合同で引き渡し訓練を行うことは難しいということになったが、本校が１１月に引き渡し訓練を実施するにあたり、当日は両小学校からも参観にきてもらうことにして、どのようなことを配慮したらよいのか検討した。検討の中では迎えに来る保護者の通行の順路や引き渡しを行う場所等が話題に上った。
また、その訓練について榊原先生・市教委の担当の方にも参観してもらい、後日振り返りの機会をもつことも確認した。さらに、本校のＰＴＡ会長の神林さんが、消防署に勤務している方であることから、アドバイザーに加わっていただくことにした。

(2) １１月９日　相森中学校の第２回避難訓練・引き渡し訓練の実施

第２回避難訓練・引き渡し訓練を実施するにあたり、三校による事前の打合会で話題になったことを参考に、ＰＴＡ会長の神林さんにも同席してアドバイスをいただきながら、校内の防災担当係会において、訓練の詳細について検討を行った。実施日については、引き渡し訓練は本校にとって初めての実施であり、保護者も負担感なく参加しやすいことを考慮して、参観日に併せて行うことにした。

【以前の訓練との変更点または新たな試みた（成果としてとらえた）こと】

①今回は参観日に来校するということで、保護者の自家用車も既に校地内に駐車している状態であるが、実際に引き渡しが行われる場合は、周辺道路の通行がかなり混雑することが予想されるので、状況に応じた３パターンの順路を事前に保護者に示すことにした。参観日の通知に、引き渡し訓練の実施と上記、実際の引き渡し実施時の３パターンの順路を付記して保護者に配布した。

②「大地震発生」を想定した訓練なので、開始時には、これまでのように職員からの告知放送ではなく、「緊急地震速報」を流すことにした。

③生徒の避難場所を指示する前に、トランシーバーを持った職員が校舎内の状況を確認して、職員室に報告するようにした。それをもとに避難場所および危険箇所を放送することにした。

④生徒が移動した後、残留生徒がいないかを（トランシーバーを持った）職員が確認。確認した場所は、後に救助が入るようになった場合にわかりやすく知らせるため、黒板に大きな「○」を書くようにした。

⑤今回は、授業中の想定なので、避難場所までの誘導を教科担任が行った。避難場所は体育館を指示。そこで学級担任に引継ぎ、人員点呼を行う。

⑥人員確認に続いて、生徒のケガ等があることを把握するために、生徒の健康状況の確認を行い、養護教諭に報告は集約するようにした。ケガ等の生徒がいた場合は、ホワイトボードに養護教諭が記入。

⑦生徒の引き渡し場所は、いったん生徒を教室に戻し、各学級で行うことにした。理由は実際の災害発生時、体育館は地域の避難場所になるため。

⑧学級担任が、迎えを確認できた保護者に「引き渡しカード」に必要事項を記入して渡し、生徒を連れていってもらうようにした。【当日、保護者の参加率５７％】

(3) １１月１５日　相森中学校区　防災および災害対応研修会

講師（学校防災アドバイザー）として信州大学教育学部教授の榊原保志先生に来ていただいた。参加者はほかに、市教委の担当者・ＰＴＡ会長の神林さん・豊洲小学校と旭ヶ丘小学校の教頭先生・本校の防災係（教頭含む）４名。

避難訓練当日、榊原先生は都合で参観いただけなかったので、ビデオで撮影したものを全員で見ながら、気づいたことがあれば、その都度意見を出してもらうようにした。

【話題になったこと一今後につながる課題として】

①避難の指示については、その場にいる職員の判断になり、臨機応変に対応する必要も出てくる可能性もあるので指示する基準について事前に全職員で共通理解しておくとよい。

②避難経路に実際に障害物や落下物を置いておくと、実際の判断にもつながる。

③大地震が発生した後、「火災が起きることもある」また、「停電になることもある」ので、そのような想定をした訓練も必要。（停電になれば、校内の放送機器は使えなくなる。）

④避難場所に体育館を指定したが、安全確認はできていたのか。体育館は、バスケットゴールや天井など、比較的落下しやすい物が多い。

⑤避難が完了した生徒は、落ち着かせるためにも、すぐに座らせた方がよい。

⑥健康観察はとても大事なことだと思う。また、ケガ等に対応する備品も揃えていきたい。薬品等以外にもブルーシートやハイブリット(保温)シートなどを用意しておくとよい。

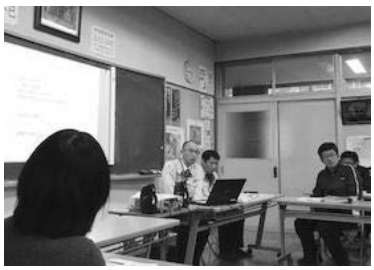
⑦生徒の引き渡しの場面で、学級担任によってその対応の仕方が違っていたので、これを機に統一した形を決めるとよい。

⑧子どもが、小学校・幼稚（保育）園にいる場合は、どのような順番で迎えに行くとよいか。小さい子は常に連れて行かなくてはならなくなるので、大きい子からの方がよい。

⑨救急を要する生徒が出た場合、あらかじめ学校でできるアセスメントを行い、引き渡しの場面でわかりやすく記入したものを使って保護者に知らせるとともに、ホワイトボード添付用・救助隊に渡す用・学校保管用と分けることができるようなカードを作成する。

(4) １２月１９日　職員研修

避難訓練の振り返りの中で、本校の通学区域で一番発生の可能性が高い災害は、千曲川の氾濫ではないかと話題になったことを受けて、千曲川河川事務所の防災情報課長である宮尾伸憲さんに来ていただいて、職員研修を実施した。



①千曲川の洪水の危険性について

・千曲川の概要　　・過去に発生した洪水

・相森中学校付近の水害の危険性

②洪水発生時の情報伝達について

③洪水発生時の避難行動について

４　まとめ

本校の防災を見直すことをねらいに、昨年度から実践的安全教育総合支援事業に支援を委ねてきたわけであるが、一昨年度の講演の中で、講師の先生がおっしゃった「島国である日本では地震をはじめとして、大きな災害は、いつでもどこでも起こる可能性があることを忘れてはいけない」という言葉が心に残っている。そして、いかなる状況の中でも「生徒全員の命を守らなくてはいけないこと」が私たちの使命であることを考えると、様々な状況においても、その対応を検討しておかなければいけないことを、全職員で認識することができた。そのことは、訓練に臨む先生方の真剣な姿からも伺うことができた。そして何より今年度、校区の小学校・市教委と防災における連携を創り始めることができたことが大きな進歩であるといえる。来年度以降、さらに、より具体的な実践を積み重ねていきたいと考える。

（文責　教頭　宮入勝彦）

木島小学校における防災管理、避難訓練の充実に向けた取組について

—防災事業モデル地域（飯山市）の拠点校として—

飯山市立木島小学校

１　はじめに

本校の立地する飯山市木島地区は、千曲川と樽川の間に位置している。昭和 57 年 9 月の台風による大雨で堤防が決壊し、本校を含む 660 世帯が床上浸水するなど、木島地区全体が水没した状態となった。その後、樽川及び千曲川の治水事業が進められ、被害は起きていない。

昭和 57 年　床上浸水後の体育館

地震に関しては、平成 24 年 7 月 10 日に長野県高社山直下を震源とする地震が発生し、全校が校庭に避難し、その後、集団下校をするという対応をした経験がある。

昨年度（1 年目）の学校防災アドバイザー派遣・活用事業では、防災アドバイザー 信州大学 榊原 保志教授に校舎内を見ていただいた。職員が危険として意識していなかった個所（窓ガラス・重量のある掲示物・キャスター付きの楽器など）を多数指摘された。指導をいただいた翌日より、落下・移動の防止に全職員で努めてきた。また、秋に緊急地震速報受信システムを設置していただき、ショート訓練を数回行った。

２　緊急地震速報受信システム設置を利用した避難訓練

⑴ 実施日時　10月 1日（月）3校時予鈴の2分前　緊急地震速報アナウンス

⑵ 方法・日程

全校児童に抜き打ち訓練。休み時間に「すぐに強い地震がくる」という想定。各自で近くの安全な場所を見つけて退避、その後、給食室より火災発生のため校庭に避難する。

＊避難訓練のあと，疑似煙の中から身を守る体験を行う。

時　間	職員の動き	児童の動き
１０：４８	業間休み（３校時予鈴の２分前） 緊急地震速報　アナウンス→効果音 （教頭 放送）「指示があるまでそのまま待ちなさい。授業のない職員は事務室へ集合せよ。」	遊んでいる場所で放送を最後まで聞き、自分で判断して身を守る。（教室・廊下・体育館・校庭等）
１０：５１	非常ベル （教頭）「Ａ先生、ランチルームの消火をお願いします。」 10秒後　（給食室の栄養士より校内電話で） 「給食室の火が強く消火は不可能。外へ避難が必要。」	余震に備えて指示があるまでそのままの状態で待つ。（まだ、緊急集合場所へ移動しない）

	（教頭 受）「了解。給食の先生方も、至急避難せよ。」 （教頭　放送）「訓練　火災。地震により、給食室から火事が出た。全校の皆さんは慌てずに一番近くの緊急集合場所に集まりなさい。先生方はそれぞれの緊急集合場所から校庭へ児童を誘導避難せよ。」	放送終了後、「緊急集合場所」に集まり、担当職員が来るまで待つ。
	（教頭）「Ｂ先生、北校舎の児童を確認せよ。」 （教頭）「Ｃ先生、南校舎の児童を確認せよ。」 （教頭）「Ｄ先生、校庭の児童を確認せよ。」	＊　Ｂ先生が北校舎で児童２名を発見し、一緒に校庭へ避難する想定で行う。
	（教頭）消防署へ通報訓練	
１０：５２	緊急集合場所から校庭へ児童を先導する。 ・職員は非常持ち出し袋と出席簿を持参し、それぞれ担当の緊急集合場所へ行き、学年順に２列に並ばせ先導する。職員が２名いたら１名は最後尾へ。 ・緊急集合場所から校庭へ避難。 校庭に本部を移動する。（本部旗、携帯用拡声器） ※本部移動作業（学校長、用務技師）	
１０：５５	校庭に避難したら人員確認 避難したら速やかに人員を確認し、大きな声で教頭に報告する。 ○学級担任：「報告します。○年○組、在籍○名、欠席○名、現在○名、全員避難完了しました。」 ○特支２担任：「報告します。職員○名、全員避難完了しました。」 教頭→学校長へ報告	＜校庭南での並び方＞ 各学年２列 本部 ６４２１３５ 年年年年年年 人員確認ができた学年は静かに坐って待つ。
１０：５８	避難完了後、係活動をおこなう。 （教頭）「係活動を開始せよ」 ○救護係：「怪我をした児童いますか！」と大声で呼びかけ、怪我した児童１名を発見後、手当てする。 救護係：「報告します。救護係、怪我した児童１名の手当てを行いました。」	避難途中で児童１名が怪我したことを想定する。
１１：０２	＜まとめの会＞　（進行：安全係） ①　消防署の方の話 ②　学校長の話	
１１：０６	＜煙の中の体験＞	南校舎２階「多目的室」において、体験をする。
１１：２０	＜事後指導＞ 体験後、事後指導を行う。（振り返りシートを使用）	

３　防災アドバイザーの関わり

(1)防災アドバイザーにご指導をいただいた点

①わずか３分で避難できていた。実際の火災では、消防車到着は平均８分かかる。校庭（避難場所）に児童が１人でもいなかった場合でも、職員は校舎に戻らない。だからこそ追い出しの職員は、責任をもって教室を巡視しなければならない。職員の追い出しの訓練が重要である。巡視した教室には、巡視済みとわかるように〇を付けるとよい。

②防災訓練は、先生方の訓練である。いざという時、先生方は自分の役割をスムーズに行うことができるか。連学年の職員のうち、１名は両方の児童を見て、もう１名は教室等へ確認に行くような役割をしたらどうか。

③災害時、校舎内に残す方がよいのか校庭に出す方がよいのか、判断を間違えない。判断は情報をもとに行う。地震が来たら、まず、校舎内に異常があるかを確認すること。火災が発生したら、まず初期消火である。初期消火が収まれば、校舎外に出る必要はない。第一発見者は消火器で消火を行う。「火事だ」と大きく発声し、校内電話で本部に伝える。30 秒後には判断できる。

④最終的な目的は、自分で自分の身を守る子どもを育成すること。災害は、学校生活中のほかに、登下校中や休日に遭うこともある。その時にどういう行動をとるのがよいのか。年３回の避難訓練では、身につかない。防災教育が必要である。保護者も参加して行ってほしい。

⑤災害は、その学校単独で起こるものではない。地域全体が被災する。小中学校で連携してほしい。兄弟で小中違う学校に行っている場合もあるので、保護者への引き渡しはどういう順番で行ったらよいのか、小中学校合同で訓練を行ったほうが良い。各校で保護者の迎えの車が渋滞させないためのルートを決める。地域や警察と連携して行えるとよい。

４　事業の成果及び今後の課題

(1)事業の成果

平成 30 年 10 月１日に防災アドバイザー信州大学教授　榊原保志先生よりご指導をいただく機会に、防災事業モデル地域（飯山市）全体で学校安全の取組の向上を図りたいと考えた。岳北消防署員、飯山市教育委員会、市内小学校や飯山養護学校の安全係にも参加していただいた。拠点校（本校）の「より実践的な避難訓練」を参観していただいた後、意見交換をしたり防災アドバイザー信州大学教授　榊原保志先生にご指導をいただいたりすることにより、飯山市すべての小中学校で学校安全の取組を実施しようとするきっかけとなった。

避難訓練参観後の意見交換会

(2)今後の課題

①来年度は、防災アドバイザーから全職員が直接ご指導をいただけるよう、職員研修会を計画する。

②災害時に、実際にありえそうな事象を想定した訓練を行うことを通し、実際に災害に直面しても児童も職員も安全に避難できる力をつけていきたい。

③よりスムーズな引き渡しの実現のため、保護者の迎えの車が渋滞させないためのルートを決め、保護者に伝えられるようにする。

５　まとめ

防災アドバイザーからのご指導のもと、さらに児童・職員が安心して学校生活を送ることができる木島小学校にしていかなければならないと感じた。そのために、日頃から防災教育を行っていくことも必要である。また、普段から大きな地震が起きたら、どんな物が落ちてくるのか、滑って移動してくるのか、倒れてくるのか等を想定し、『これは危険だな』と感じたものをすぐに固定したり取り除いたりするなど、災害リスクの減少に取り組んでいく。

昨年度 10 月に緊急地震速報受信機を設置していただいたことにより、地震に対する初動のショート訓練を何度も行うことができ、子どもたちも自分で考えて身を防ぐ力が身についてきている。

休み時間中、緊急地震速報直後

（文責　教頭　藤澤賢也）

学校防災アドバイザー派遣・活用事業の取り組みについて

―防災マップ作りを中核に据えた防災教育の実践（２年目）―

飯綱町立飯綱中学校

１　はじめに

「この山とともに生きて」という一節で始まる本校校歌に象徴されるように，生徒たちは日々，飯縄山をはじめとする恵まれた自然に囲まれながら学校生活を送っている。

本校では，生徒が主体的，創造的に生活し，学ぶ楽しさを味わっていくことを願い，「自由・友愛・剛健」を学校教育目標に掲げている。総合的な学習の時間(いいづなタイム)では，生徒が地域の「ひと・こと・もの」に関心を持ち，自分と地域のつながりを見つめ，地域の一員として未来を担っていこうとする生徒の育成を目指し，発達段階に応じて，「地域に学ぶ（１年)」，「視野を広げる（２年)」，「地域に発信する（３年)」ことができる授業作りに取り組んでいる。

２　飯綱町立飯綱中学校の防災教育について

本校では，平成２６年度から生徒会が中心になり，東日本大震災で原発事故が起こった福島県を支援してきた。しかし，福島への支援は，学校内外の取り組みとして定着したものの，東日本大震災で被災された方々の心情を考えることや，自分自身が防災意識を持ち，「自分の命は自分で守る」という意識を高めるまでの学習には至っていなかった。

そこで，昨年度から，１年生の後期いいづなタイム（２０時間)で，東日本大震災で被災された方々の心情に触れ，地域の自然災害を見つめ，地域の防災のためにどのような取り組みをすればよいのかを考える学習を行っている。この学習では，学校防災アドバイザーの指導のもと，防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップ作りを行っている。生徒は ipad を持って地域のフィールドワークを２回行い，自分が住む地域にある危険箇所や災害時の避難場所の写真を撮り，Web-GIS を利用して地域の防災マップを作成する。防災マップ作りを通して，生徒は災害時における適切な行動について理解を深めていく。

このような防災学習を通して，生徒が防災という観点から地域を見つめ直し，防災意識を高め，災害時の思考力・判断力を付けていくことを願っている。

指導計画(全２０時間)

段階	時	学　習　内　容
出会い	1	○防災学習「震災～故郷への思い～」のオリエンテーション
	2 3	○木村紀夫さんの講演会(地域の方，保護者も参加) ・木村さんの家族やふるさとへの想いを聴く。
防災マップ作り	4 5	○信州大学廣内教授の講演会「飯綱町の防災マップを作ろう！」 ・防災マップとは何か，どのように作っていけばよいのか知る。
	6 7	○フィールドワーク①(信大生，飯綱町社会福祉協議会の協力) ・自分の地区で，グループごとにフィールドワークを行う。 ・地震，水害，安全の観点で調査する。データはタブレットに入力する。
	8 9	○フィールドワークの振り返り①(信大生の協力) ・DoChubu 落合さんからデータの活用の仕方を学ぶ
	10 11	○フィールドワーク②(信大生の協力) ・フィールドワーク①の振り返りをもとに，さらに情報を収集する。
	12 13	○防災マップ作り(信大生の協力) ・Web-GIS を利用して，防災マップを作成し，防災という観点から自分たちの地域の課題を発見する。
	14 15	○発表会準備 ・各グループ，地区の課題を提言としてまとめ，発表準備をする。
	16 17	○学年学習発表会（信大生，社協の方の参観） ・自分たちの地域の防災について，提言を発表する。
発信	18 19	○保護者への学習発表会準備 ・学年発表会の反省をもとに，より良い発表の仕方を考える。
	20	○学習発表会 ・防災学習の成果を地域，保護者に発表する。

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　講演会「飯綱町の防災マップを作ろう！」

①　期　日　平成３０年１０月５日(金)

②　指導者　信州大学教育学部　廣内大助教授

③　内　容　東日本大震災から考えること
　　防災マップ作りの意義について

(2)　タブレット端末と Web-GIS を利用した防災マップ作りについての指導

①　期　日　平成３０年１０月１１日(木)

②　指導者　DoChubu 落合鋭充さん

③　内　容

フィールドワークを円滑に行うため，機器の利用の仕方等ついてご指導いただいた。

(3)　フィールドワークの指導(２回)

①　期　日　平成３０年１０月１２日(金)，１０月２５日(木)

②　指導者　DoChubu 落合鋭充さん　信州大学教育学部学生９名

③　内　容

１０月１２日の１回目のフィールドワークでは，学校に待機して機器のトラブル等の対応していただいた。2回目のフィールドワーク(１０月２５日)の際は，来校していただけなかったが，機器のトラブル等は電話で対応していただいた。信州大学の学生については，生徒の班に入って一緒に活動していただき,生徒の活動時の安全確保についても協力していただいた。

(4)　いいづなタイム学習発表会参観(予定)

①　期　日　平成３１年２月１４日(木)

②　指導者　信州大学教育学部　廣内大助教授　DoChubu 落合鋭充さん

③　内　容

飯綱町では今年度，飯綱町学校防災防犯推進委員会を立ち上げた。授業参観後は，お二人にも委員会に出席していただき，来年度以降の飯綱町学校防災防犯教育についてご提言をいただく予定である。

４　事業の成果及び今後の課題

・　廣内大助教授の講演をお聞きして，生徒は長野県でも自然災害が多く起こっていることを知った。振り返りでは,「自分の命は自分で守りたい」という記述が多く見られ，防災への意識や防災マップ作りに対する意欲を高めた。

・　防災マップ作りは２年目だが，落合鋭充さんのご指導，信州大学教育学部の協力のもと，円滑に行うことができた。昨年は防災マップを作っただけで学習が終わってしまったが，本年度は，作成した防災マップを「デジタル安心安全マップ」としてインターネットで閲覧できるようになり，生徒は学習の成果や地域の役に立てたことを実感することができた。

・　来年度以降も事業を継続させるため，生徒の学習の成果やこの事業の意義を教職員の中に広めていくことが必要である。また，飯綱町教育委員会を中心として，飯綱町学校防災防犯推進委員会を設置し，防災・防犯教育のより一層の充実を図っていきたい。　　（文責　教諭　勝山　厚志）

学校安全総合支援事業の取組について

― 養護学校における防災教育の事前・事後指導のあり方 ―

長野県木曽養護学校

１ はじめに

～木曽路はすべて山の中～ 本校は、東に木曽駒ケ岳を仰ぎ、前には清流八沢川が流れる自然豊かな環境に立地している。平成８年、地域の人々の長年の願いを受けて木曽養護学校は開校した。開校以来「自らの力でたくましく社会で生き抜くことのできる丈夫で心豊かな子ども」を学校教育目標とし、「みんなと 仲よく 遊べる子」「自分のことは 自分でできる子」「明るく 思いやりのある子」「進んで働き やり抜く子」の具現を図っている。今年度は、小学部４名、中学部１０名、高等部２６名、計４０名の児童生徒が在籍しており、県内の知的の特別支援学校の中では小さな規模の養護学校である。

２ 防災体制について

平成２９年６月２５日（日）の朝７時２分に、木曽地域周辺に震度５強の大きな地震が発生した。本校では大きな被害もなく、地震後も通常日課で生活することができていたが、余震や二次災害の恐れもあり、しばらく予断を許さない状況が続いた。児童生徒の中には、地震を体験した恐怖心からか、しばらく動揺して落ち着かない様子の子も見られ、改めて安全防災教育の重要性を痛感した。

本校では、年間３回の避難訓練を計画し、校内で火災や地震が発生したという想定で、児童生徒が避難経路に従い、安全に避難できるような訓練を続けている。また、寄宿舎においても独自の非常時訓練を実施している。それに加えて昨年度からは、非通知のショート訓練も定期的に実施し、訓練で身に付けたことをいつでも発揮できるようにしている。

３ 学校防災アドバイザーの関わり

(1) １０月９日（火）に、昨年度に引き続き、宇都宮共和大学こども生活学部の白神晃子先生に来校していただき、第１回目の活用事業を実施した。その中で、木曽養護学校の危機管理マニュアルの確認（点検）や、１１月２日（金）の第３回避難訓練に関する事前・事後指導のあり方についての意見交換などを行った。

(2) １１月２日（金）の第３回避難訓練に合わせて、第２回目の活用事業を実施した。白神先生と木曽消防署員の方３名に児童生徒への事前指導や防災訓練中の避難の様子などを参観していただき、安全係との懇談を行った。その後、白神先生と校内安全点検を実施し、昨年度からの改善点や新たな課題についてのご指導をいただいた。

４ 事業の成果及び今後の課題

(1) １０月９日（火）の第１回活用事業で確認されたこと

① 危機管理マニュアルを活用した訓練について

ア マニュアルに沿って行動することが原則だが、臨機応変な対応も重要である。訓練をする際には、不明者がいるパターンやいないパターンなど、マニュアルのどこに重点を当てて訓練するのか、一回一回事前に確認した上で実施する。

② 防災に関する事前指導の具体的な方法について

ア 事前指導の基本は、「おはしも（押さない・走らない・しゃべらない・戻らない）の徹底」「机の下にもぐる」「ヘルメットの着用」「放送を聞く」で、全校統一した内容で行う。

イ　知識ベースの事前指導だけでなく、実際にヘルメットをかぶってみたり、セーフティースペースに集まってみたり、教室から外に出て危険個所を確認したり、サイレンの音を聞いてみたりするような体験的な事前学習を実施する。

ウ　車椅子の生徒は、避難経路に障害物を置いておき、狭い通路をどのように通るか、どのくらいの幅が必要かなどを確認する。また、逃げ遅れた時の職員の応援体制も検討する。

エ　こうなってほしい姿（願い）を持って訓練をする。自分の命を自分で守れる子にすることが前提だが、教師の支援が必要な子については、教師の願いと子どもの実態が一致するようにし、そのためのスキルをしっかり身に付けられるようにする。

オ　机の下にもぐる、ヘルメットをすぐに着用する、セーフティースペースに集まるなどの対応ができない場面では、すぐにダンゴムシのポーズ（頭を抱えて丸くなる）がとれるようにする。また、不安定な机の下にもぐる時は、斜めに入って机の脚を持つポーズ（サルのポーズ）をとれるようにするなど、場面のカードを見せてそのポーズをとる練習をゲーム形式で行っていく。

③　１１月２日（金）の第３回避難訓練に向けて

ア　「煙から身を守る」ことを重点とする。煙で周囲が見えない状況を想定し、アイマスクを着用（着用が難しい子は目をつぶるだけでもよい）して壁伝いで歩いたり、四つん這いになって身を低くして進んだりするような事前指導を実施する。その際、迷路などゲーム感覚で楽しめる内容にするなどの工夫をする。

イ　煙を吸わないためにハンカチで口を押えるなどの動作を確認する。車いすの子やハンカチで口を押えられない子は、どうやって煙を吸わないようにするか検討しておく。

(2)　実際に実施した防災に関する事前指導の概要（中学部の実践を中心に）

①　防災教育に関する全校および各部の目標（願い）を設定

『全校の目標（願い）』

ア　自分の生活している場所で安全なところ、危険なところを知る。

イ　地震が起きたら、机の下にもぐるなどして、すぐに自分の身を守れる。

ウ　火災が起きたら、「おはしも」を守り、職員の指示に従って落ち着いて避難する。

『中学部の目標（願い）』

ア　自分の身を守る方法を知り、体験する。

イ　自分で身を守ったり、近くの人の指示を聞いたりしながら、落ち着いて安全に避難することができる。

ウ　いざという時、不安定の中でも周りの大人と一緒に動ける。

エ　避難所など快適ではない場所でも過ごせる。

オ　自分の身を守るために、できることを一人ですることができる。

②　中学部による事前指導の展開概要

ねらい：「ゲームやシュミレーションを通して、火事や地震の時の自分の身の守り方を知ることができる。」

ア　写真を見て、どんな災害の写真か考える。（防災について学習していくことを知る。）

イ　校内にある消火器や非常口、避難集合場所を見つけ、校内の地図にシールを貼る。

ウ　消火器探し、非常口&避難集合場所探しをする。

⇒　実施後、いくつあったか、どこにあったかを振り返る。

【実際の生徒の様子】

・　１０月２３日（火）：地震や火事の写真を提示すると、「え～」「こわい」「なんでこんなことになっちゃったの？」と驚く生徒。「地震や火事が起きる前に、自分のことを守る方法を勉強していくよ」と伝えると、意欲的に活動に取り組もうとする姿が見られた。消火器探しでは次々に校内にある消火器を見つけ、地図にシ

ールを貼っていた。「結構たくさんあるんだね！」とびっくりしている生徒もいた。「うちにも確かあったよ」と家にも消火器があることを伝えてくれた生徒もいた。

・　１０月２４日（水）：非常口と避難集合場所探しをした。事前に非常口と避難集合場所のマークを提示しておくと、積極的にそのマークを探し、地図にシールを貼る姿が見られた。「先生ここにもあるけど、これなに？」と防火扉に興味を示す生徒もいた。

エ　防災ダックゲーム説明

⇒　災害の場面ごとに動物の名前を言いながら、ポーズをとるゲーム。

オ　防災ダックゲームの実施

⇒　教師が災害のイラストカードを出す。

⇒　教師が「せーの」と言ったら動物の名前を言いながらポーズをとる。

⇒　間違えたら席に座る。

【実際の生徒の様子】

・　１０月３０日（火）：防災ダックのカードゲームでは、地震、火事、道路を渡る、雷、台風のポーズを覚えるようにした。ゲーム形式にしたので、「絶対まちがえないぞ」と楽しみながら学習に取り組む姿が見られた。他のカードのポーズを説明すると、「誘拐されそうなときは、防犯ベルとか鳴らすのもいいよね！」と積極的に自分の考えを伝える生徒もいた。

カ　１１月２日（金）の避難訓練の予告

⇒　避難訓練の流れ、防火扉&煙体験の予告。

キ　煙体験の練習①

⇒　煙の中での避難のポイント（ハンカチを口にあてる、姿勢を低くする、壁をさわりながら移動する、「おはしも」を守る）を伝える。アイマスクをして中学部前の廊下を玄関ホールに向かって歩く。アイマスクはゴールまでとらないことを伝える。

⇒　ハンカチを口にあて、姿勢を低くし、壁をつたいながら歩くことを伝える。ゴールの目印としてぬいぐるみを玄関ホールに置いておく。

【実際の生徒の様子】

・　１０月３１日（水）：パワーポイントで避難訓練の予告と流れを説明した後、煙の中の様子を写真で提示すると、「えー！」と見えづらさにびっくりしている生徒もいた。煙体験の練習では、始めに教師が見本を示すと、どの生徒もハンカチを口にあて、低い姿勢で壁を触りながら避難していた。どの生徒もぬいぐるみに触るまでアイマスクをとることなく、移動していた。距離を伸ばして２回行ったが、どの生徒もポイントを守りながら取り組んでいた。授業のあとに感想を聞いてみると、「もう見えなすぎて、どうしたらいいかわからなかった！」と答える生徒がいた。

ク　避難訓練の流れを確かめながら行動

⇒　実際の訓練の流れに沿って行動する。防火扉の場所を確かめる。

ケ　煙体験の練習②

⇒　中庭前廊下から体育館までアイマスクをして歩く。アイマスクはゴールまでとらないことを伝える。ゴールの目印としてぬいぐるみを体育館入り口前に置いておく。

【実際の生徒の様子】

・　１１月１日（木）：避難訓練のシュミレーションはヘルメットを被ったり、教師の指示を聞いて行動したりとスムーズに取り組んでいた。煙体験の練習は２回目ということもあり、どの生徒もポイントをおさえながら取り組んでいた。体育館までの経路は途中で右に曲がるので、壁を触りながら経路を確かめて進む生徒が多く見られた。

③　中学部による事後指導の展開概要

ア　避難訓練の振り返り

イ　新たな防災ダックの説明

⇒　災害の場面ごとに動物の名前を言いながら、ポーズをとる。(前回のポーズ＋誘拐（羊)、津波（チーター)、蜂（象)、洪水（かえる）

ウ　防災ダックゲームの実施

【実際の生徒の様子】

・　１１月６日（火）：前回のカードのポーズやゲームのルールをよく覚えていた。新たに４つ新しいポーズを覚えたが、災害の言葉を言うと、すばやくそのポーズをとることができた。

エ　煙体験の振り返り

⇒　地震が起こったあと、建物の中はどのようになるのか。

⇒　もし地震のあとに火事が起こったらどうやって避難すればよいか。

オ　煙体験の練習③

⇒　アイマスクをして中学部前の廊下を玄関ホールに向かって歩く。ハンカチを口にあて、姿勢を低くし、壁をつたいながら歩くことを伝える。

⇒　廊下の途中に机や太鼓など障害物を置いておき、避けたり、どかしたりしながら避難する。ゴールの目印としてぬいぐるみを玄関ホールに置いておく。

【実際の生徒の様子】

・　１１月７日（水）：煙の中の避難の仕方の学習も三回目ということもあり、どの生徒もポイントを守りながら取り組めた。途中にある太鼓などを触りながら慎重に避難する生徒もいた。車椅子の生徒は教師が抱きかかえながら避難したが、どのように避難するのが一番安全なのか考えていく必要があった。

カ　地震の時、煙の中での避難の仕方についての振り返り

キ　新たな防災ダックゲーム

⇒　災害の場面ごとに動物の名前をいいながら、ポーズをとる。【地震（ダック)、火事（たぬき)、道路（ねずみ)、台風（うさぎ)、雷（亀)、津波（チーター)、蜂（象)、洪水（かえる)】

【実際の生徒の様子】

・　防災ダックができなかった生徒もいたので行った。一通り覚えている生徒に前に出てきてもらって見本を友だちの前で見せてもらうようにした。ゲームでは、教師も一緒に参加して行うと、大いに盛り上がった。災害のカードを提示すると、すばやくその動物の名前を言ったり、ポーズをとったりする生徒が多かった。

５　まとめ

本年度は、防災教育の事前・事後指導のあり方に焦点を当て、全校で防災教育の目標（願い）を据えて取り組んだ。中学部では、「自分の身を守ろう」という小単元を設け、消火器のある場所を覚えたり、地図を使って非常口や避難集合場所を確認したりした。煙体験に向けては、アイマスクを使って見えにくさを体験し、ぬいぐるみに触れたらアイマスクをとるというゲームや、防災ダック（カードゲーム）を使って地震や火事などが自分の身にせまった時にどんな行動をしたらよいかをゲーム感覚で学ぶようにした。今後は、全校でもこうした小単元を設定して実践していけるようにしていきたい。また、目標（願い）の設定については、「小学部では、先生と一緒に自分の身を守れる」、「中学部では、学校内において自分の身を自分で守れる」、「高等部では、どんな場所においても自分の身を自分で守れる」など、徐々にステップアップしていくようにし、成長段階に応じたねらいで訓練が実施できるようにしていきたい。　　（文責　教頭　百瀬俊樹）

平成 30 年度　学校安全総合支援事業

実践報告集

発行年月　　平成 31 年２月

発 行 者　　長野県教育委員会